

大岡昇平「野火」を〈読む〉

— 反復と恩寵 —

宮坂 覺

はじめに

「野火」は、海外にも知られた大岡昇平の代表作、あるいは、最高傑作の一つといえることができよう。翻訳も多く、外国でも広く読まれている作品でもある。集団から放逐され、生と向き合いながら、人間の尊厳を守りつつ彷徨する生の極限とその向こうを描こうとした物語と捉えることができよう。

戦争体験をした作者が、終戦三年後の一九四八年から世に問い、発表雑誌廃刊もあり五年ほど中断し、一九五一年完結、翌年単行本として公刊した。すなわち、『文体』三、四号（一九四八年十二月、一九四九年七月）に「一九塩」までを発表するも、雑誌廃刊のため中絶。『展望』に『文体』稿（第一、二回）の冒頭部を削除、訂正を加え章分けを施し加筆連載（一九五一年一〜八月）され、翌年章分けなどを整理し創元社より刊行。第三回読売文学賞を受賞した。

「野火」の提起する問題は、半世紀以上を経た現代においても色褪せないばかりか、表層的には陳腐な感を与えつつ、今なお新鮮さまで感じさせる。そこに人間の生の意味、生きることの意味、生の向こう側に何を見るのか見ないのかなどが、精神病者というフィルターを置きながら、その一方で執拗なまでに生に執着し、戦慄を覚えるほどにそれらを誠実に展開する。集団からの放逐、彷徨、帰属拒否、離脱による絶望感と孤独、さらに集団帰属願望、

断念と孤立と逡巡、彷徨、孤独と絶望、生の危機と生存への意志、人智にない出来事と受け入れ。帰属、離脱、孤独、逡巡、絶望が反復される。

テクスト「野火」は、「たとひわれ死のかげの谷を歩むとも ダビデ」のエピグラフを掲げたうえで、「一 出発」から最終章「三九 死者の書」のそれぞれ章題「を持った三九章によって構成されている。

一 出発

私は頬を打たれた。分隊長は早口に、ほほ次のやうにいつた。

「馬鹿やろ。帰れつていはれて、黙つて帰つて来る奴があるか。帰るところがありませんつて、がんばるんだよ。さうすりや病院でもなんとかしてくれるんだ。中隊にやお前みてえな肺病やみを、飼つとく余裕はねえ。」

と、テクストは開かれる。

エピグラフは、「詩編 一三編 ダビデの歌」^二の四節である。すなわち、読者は、ダビデのイメージを遠景として与えられ、テクスト冒頭部に遭遇する。「私」(田村一等兵)は、帰属すべき集団に暴力を伴って拒否され、一度拒否された集団に向かって「出発」を強要されることから、テクストは開かれた。そして、ダビデのごとく彷徨の「出発」を匂わせている。が、エピグラフの詩篇二三章四節は、「禍害をおそれ／なんぢわれとともに在せばなり／なんぢの笞なんぢの杖のわれを慰む」と続く。が、「おそれじ」というダビデと違っているのは、「私」が直面する大なる〈恐れ〉である。「私」には、〈なんぢ〉と呼びかけるあてもなく、いわんや〈笞〉も〈杖〉もないのである。「病院へ帰れ。入れてくんなくつたら、——(中略)——死ぬんだよ。手榴弾は無駄に受領してるんぢやねえぞ。それが今ちやお前のたつた一つの御奉公だ」と言い渡される「私」に容易に想定できるのは、再度の拒否による「帰る」場所、帰属する場の喪失と希望なき〈死のかげの谷〉の彷徨、そして、終局は自決を想定させる。冒頭から、死に向かつての「出発」であるという予感も伴う。

が、テキスト「野火」は、次のように閉じられる。

しかし銃を持った墮天使であつた前の世の私は、人間共を懲すつもりで、実は彼等を食べたかつたのかも知れなかつた。野火を見れば、必ずそこに人間を探しに行つた私の秘密の願望は、そこにあつたかも知れなかつた。／もし私が私の傲慢によつて、罪に墮ちようとした丁度その時、あの不明の襲撃者によつて、私の後頭部が打たれたのであるならば——／もし神が私を愛したため、予めその打撃を留意し給うたならば——／もし打つたのが、あの夕陽の見える丘で、飢ゑた私に自分の肉を薦めた巨人であるならば——／もし、彼がキリストの変身であるならば——／もし彼が真に、私一人のために、この比島の山野まで遣はされたのであるならば——／神に榮えあれ。

(三二九 死者の書)

「私」は自決の終結ではなく生を生き延び、そして「／もし……であるならば——／もし」を反復し、さらに、テキストは「神に榮えあれ」で閉じられている。となると、冒頭でダビデとは異なつた位相で「出発」した彷徨は、なにを「私」に齎したのであろうか。神なき世界で生に拘り意味を考えることから、第三の視線の発見に至つたことになるのであろうか。ならば、予定調和的方向性に貫かれたテキストとなる。が、そうとばかり言えない。

ここで、確認しておかなければならない問題がある。テキストは、最終章の「三九死者の書」の二章前の「三七狂人日記」において、新たな展開をおく。

三七 狂人日記

私がこれを書いているのは、東京郊外の精神病院の一室である。窓外の中庭の芝生には、軽患者が一団一団とかたまつて、弱い秋の陽を浴びてゐる。病舎をめぐつて、高い赤松が幹と梢を光らせ、これら隔離された者共を見下してゐる。

と、小説的時間（「私は……」）とテキストが開かれていることを思えば、最初から物語的要素を持つていたことは予想されたが）から、読者は物語的時間に自らを発見するのである。さらに、読者は、それまで読んできたテキストが（狂人日記）（そもそも「疎開日記」などによれば、「野火」は、〈狂人日記〉として起筆されている）であるかも知れないことを明かされる。戦場から帰還した「私」は、精神病院に収監され、リハビリを受けている。その中で手記を執筆しているという作品のフレームが明かされる。通常、語りのフレームは、冒頭か終末部であるのが通常であるし、自然である。因みに、初出稿では、冒頭の章で、狂死した主人公の手記であることが明かされている。定稿におけるテキストの変調を、テキストの孕むノイズと見るか、小説作法と見るかは評価が分かれよう。

以上のような問題を設定して、「野火」の作品世界の解説を試みたい。

一 孤独と絶望の彷徨

このテキスト「野火」の「孤独と絶望そして逡巡」の反復構築は注目すべきであろう。反復はずれ、差異をもたらし、学習機能を読者に（あるいは、「私」にも）発見させる。前述したようにテキスト「野火」は「私は頬を打たれた。分隊長は早口に、ほほ次のやうに言った」で開かれる。分隊長の言葉から、「私」田村一等兵が病気のため分隊から野戦病院（患者収容所）に送られるも、病院では受け入れられず分隊に戻る。さらに、分隊長は厄介者として再度田村を分隊から放逐することを宣言しているところからテキスト「野火」は開かれたのである。

この作品世界が開かれた時点で、「私」は、すでに、二回の集団離脱を受けている。（十一月の中旬レイテ島の西岸に上陸）した「私」は（軽い咯血）をし、（五日分の食料を与へられ）病院（患者収容所）に向かった。その時は、食料持参ということで滞在を許されたが（三日後）病院を出された。その時点では、通常の集団帰属がなされていた（時間的には多少破綻しているが）。しかし、戦場で結核を患ったことにより食料収集に参加できない「私」

は、隊の〈余計者〉に認定されたのである。そして、食糧節約のために野戦病院に追われる（一回目）。病院においても食料と人力節約のために受け入れられなかった（二回目）。再度、元の部隊に帰還するが、帰属を暴力を持って拒否される。ついに、「病院へ帰れ。入れてくんなくつたら、——（中略）——死ぬんだよ。手榴弾は無駄に受領してらんぢやねえぞ。それが今ぢやお前のたつた一つの御奉公だ」と、〈致命的な宣告〉を受けた（三回目）。ここに至って、末期的な戦場の状況を考えれば、「私」の死への彷徨が確定する。その端緒でもあり、〈出発〉でもある。

「私」は、中隊という帰属すべき集団からおそらく永遠なる離脱の認識を持って、再度、病院に向かう。勿論、病院は、帰属する集団の場ではない。一時的な帰属の集団である。何らかの障害を持って入る病院は、時間的な違いはあっても出ること、障害が解消された時点で離脱することが前提である（死による自然離脱もあるが）。確かに、一回目入院（入所）は、食料や時間の問題を脇に置けば、表面的には、帰属の移動の連携はささやかながら守られていた。が、彼は、〈食料を持たない患者〉を受け入れてくれるはずのない、それを理由に帰属を拒否されるであろう病院に再度山中を一人向かう。今の彼には、一縷の望みさえ望めないそこに向かうのが、この時点では正義であった。「日常（末期的戦場ではある）から追われ↓新たな集団社会（人間関係）に入ろうとするが拒否され↓あてのない孤独の彷徨を始める↓出来事により新たな社会（日常・人間関係）の発見↓再度日常からはぐれる↓絶望的孤独」の反復の始まりである。

「私」は、おそらくは帰属の望みのない〈約六軒〉先の病院に向かう（——「一 出発」）。病院に行くのは、〈あそこ〉に「坐りこん」である人たちに会うため（〈私と同じく行き先のない彼等〉を〈見た〉）（傍点はテキスト、以下同じ）いたためであった。途上、「私」は、〈陰性の幸福感〉を感じたりする。

行く先がないといふはかない自由ではあるが、私はとにかく生涯の最後の幾日かを、軍人の思ふままではなく、私自身の思ふままに使ふことが出来るのである。

「私」は、自分の生の持ち時間を「幾日か」と考えていたのであり、その時間を集団社会から自由に生きようとしている。それは、孤独によって与えられる、生の認識である。が、「私」は、病院の近くになって分かれ道で病院に至る道を選ばずに、未知の道を選ぶ。かすかな帰属への道を捨てたのである。

奇怪な観念がすぎた。この道は私が生れて初めて通る道であるにも拘らず、私は二度とこの道を通らないであらう、といふ観念である。私は立ち止り、見廻した。

この分かれ道は何を意味するのか。そして、導かれるように岐路がない孤独の世界に入る。「私」は、

その時私を訪れた「運命」といふ言葉は、もし私が拒まないならば、容易に「神」とおき替へ得るものであった。

と、述懐する。孤独の彷徨は、人格的神ではないが、「神」との遭遇を予期させた。この部分は、「私」の運命的な選択であった。それは、神なき世界から神の世界に紛れ込んだということもできる。(——「二道」)そして、天に立ち上る〈黒い煙〉を発見する。〈単なる野火であるにせよ、その下に燃焼物と共に比島人がゐるのは明瞭で〉あった。敵と遭遇する敵地で発見する煙は、生活の次元からゲリラの原始的信号まで多くの要素を孕む。「私」は、〈初めて見知らぬ道を選んだことを後悔した〉が、〈既に死に向かつて出発してしまつた今、引き返すのは嫌であつた〉。そして、〈比島人〉に遭遇する。が、彼は、「私」から逃亡していった。その地を急ぎ離れたが、以来しばしば人の気配がない野火を見ることになる。

私の行く先々に、私が行くために、野火が起るといふことはあり得なかつた。一兵士たる私の位置と、野火

を起すといふ作業の社会性を比べてみれば、それは明らかであった。私は孤独な歩行者として選んだコースの偶然によつて、順々に見たにすぎない。

と、いい聞かせる私には、〈私の行く先々に、私が行くために、野火が起るといふことはあり得なかつた〉^四と自覚する野火は、以後「私」とつて道先案内人のような意味を持つ。最初の生活的なイメージから、運命あるいは神との遭遇の取っ掛かりのシンボルになりつつあつた。が、彼は、〈魔法の解除を求めて、病院のある部落を地平に〉探す。そして、死の世界から迂回して、再び病院を目指した。(——「三 野火」)「私」は、一旦避けた帰属不能な病院を目指したのは、運命(神)の世界を受け入れることはできなかつたからであろうか。〈魔法の排除〉という認識が、帰属不可能な病院に向かわせたのである。

病院に行き着くが、覚悟していたように、彼も〈行く所のない〉「坐り込ん」でいる病兵の一人にしかたななかつた。彼らは、病院(患者避難所)の周辺を彷徨し、死を待つ集団であつた。救いは望めなかつた。敵の砲弾が聞こえてきたりした。そのささやかな集団で顔馴染の安田と再会する。(——「四 坐せる者等」)日も暮れ、少ない食料を分けながら食事をする(——「五 紫」)。そんな中、同じ中隊の若い兵士永松と〈速成の親子〉を演じる安田をみる。が、「私」は、野火の幻想に襲われて寝付けなかつた。(——「六 夜」)。次の日の早朝、敵の組織的砲撃によつて目を覚ました。そして、集団から離脱してその地を逃れた。(——「七 砲声」)数日後、丘陵地に迷い込んだ自分を発見した。食料も尽き始めていた。が、

死ぬまでの時間を、思ふままに過すことが出来るといふ、無意味な自由だけが私の所有であつた。携行した一個の手榴弾により、死もまた私の自由な選択の範囲に入つてゐたが、私はただその時を延期してゐた。

帰属する集団を失い、孤独で絶望的な彷徨の中にいた。丘陵地の頂をさまよつていたが沢におり川に沿つて歩む

うち、〈死は観念ではなく映像となつて近づいてきた〉。

私は吐息した。死ねば私の意識はたしかに無となるに違ひないが、肉体はこの宇宙といふ大物質に溶け込んで、存在するのを止めないであらう。私はいつまでも生きるであらう。

と、考える。死の問題に対して「私」の変化がみられる。〈死は観念ではなく、映像となつて近づいてゐた〉ためか、意識は消滅するが肉体は物質として生き続けるといふのである。すなわち、「私」は、自分の存在を「意識」と「肉体」で認識し説明しようとしている。「心」あるいは「魂」の問題が欠落していることは捉えておくべきである。――「八 川」 数日彷徨つて、中隊を出るとき（三日月）は、〈満月にちかく〉なつていた。集団から離脱して、孤独の中で（三日月）〈満月にちかく〉に時間は、経過していたのである。いつしか椰子の林に自分を見出す。そして、「私が命を断つべきは今」と、また、「まだ自分の行為を選ぶ力が残つてゐるうちに、自分に出ることをするべきではなからうか」とも思う。が、〈輝く月光の行きわたつた空が、新しい渴望〉〈生への執着〉を生んだ。平穩な過去において思い当たる感覚であつたからである。そして、それを、

今私があゝの空に焦れるのは、及び難いと私が知つてゐるからであらう。私は自分が生きてゐるため、生命に執着してゐると思つてゐるが、実は私は既に死んでゐるから、それに憧れるのではあるまいか。

と、考える（――「九 月」）。それから二日後、その椰子林を離れる。丘でシャベルの跡と鶏鳴を聞き（人界）の近いことを知る。小屋を発見するが、人はいなかつた。（――「二〇 鶏鳴」）数日小屋にとどまり、〈洋風のクッション〉を枕に〈樂園の思想〉を味わう。火がないのに不自由したが、食料もあつた。昼は丘の反対側の海が見える場所を過ごした。ある日、海に面した林の緑の上に〈光るもの〉を発見した。（――「二一 樂園の思想」）

「私」田村は、帰属していた中隊の部隊長から致命的な通告を受けた。ささやかな帰属の場所を失うこととなる。彼は絶望の中で〈死のかけの谷〉を彷徨する。合法的に帰属しようと残されている病院もすでに希望は失われていた。が、死ぬまでは、命を明日延ばしにしながら、あてもなく彷徨う。しかし、彼には人間としての尊厳は失われているかにみえる。孤独の中で自分の人生に近接もした。「私」と同様、病院から切り捨てられ帰属する場を失った集団に、〈速成の親子〉（帰属）を見たりしたが、敵の砲撃にその帰属の場を失う。「私」は、病院への道も〈初めの道〉を選び、またこの時もあえて仲間たちのところには帰らず一人の道を選んだ。帰属する社会への希望を失った「私」が見え隠れしている。再び、自らの生に近接してゆくのである。帰属と離脱の反復を整理すると以下のようになる。

A) 部隊から野戦病院に放逐↓病院は拒否 ↓B) 部隊に帰る ↓C) 部隊から復帰拒否↓一人山中を絶望的彷徨し、野戦病院を目指す↓一度はその行程を外れるが病院に向かう ↓D) 病院周辺でたむろする希望なき仲間
 帰属↓希望なき死を待つべき集団の中に〈速成の親子〉（帰属集団）を見る ↓米兵の組織的砲撃 ↓E) 一人になる。そして、丘の上の平穏な日常と林越しに〈光るもの〉を発見することになる。

二 象徴としての〈十字架〉と予期せぬ出来事

〈光るもの〉を発見した「私」田村一等兵は、その形を確かめるため、自分のいる位置を変えた。そして、〈光るもの〉が十字架であること知った。

私は戦慄した。その時私のおそれゐた孤独にあつては、この宗教的象徴の突然の出現は、肉体的に近い衝撃を与へた。／十字架は恐らく林の向うの、海に臨んだ村の会堂の頂を飾るものであらう。会堂は比島の村で常に一番高い建物である。それではあの下にやはり家があり、人がゐる。

彼の眼前に出現したものは、〈野火〉ではなく〈十字架〉であった。「私」は、末期的な状況の中で自然の裡で小
 康を得たとしても、敵の中で死を待つべき人物であることは相違ないのである。これまでは、物質としても肉体的
 なものとしても目的なき生存と戦いながら自己の消滅を避けてきた。が、今、社会的存在としても自分を見出そう
 としている。帰属する集団がないばかりか「敵」と対する〈私〉の再発見である。

彼等がいくら彼等同士の間で、あの十字架の下で信心深い生を営むとしても、私に対してはすべて敵であつ
 た。／私は彼等を少しも憎んではゐなかつたが、私の属する国が彼等の属する国と戦つてゐる以上、我々の間
 には、十字架を含めて、何の人的関係もあり得なかつた。我々はいはば物質的な危機の状態にあつた。十字
 架といふ万国的愛の象徴も、敵に所有されてゐるかぎり、ただ危険の象徴にすぎないのである。／しかし私は
 その十字架から眼を離すことが出来なかつた。(中略)その夜私は十字架を考へて過した。死を控へながら飽食
 した私の心の空虚は、容易にこの人的映像にとつて占められたのである。

若き日に〈近づき〉一時は〈心酔〉もした「私」にとつて、〈十字架が馴染のないものではなかつた〉。それゆえ
 に、〈敵に所有されてゐる〉十字架であつても、〈肉体的に近い衝撃を与へ〉その〈人的映像〉は、ただならぬ
 ものであつたことは想像するに難くない。ここで看過してはならないのは、〈私〉を、「意識」と「肉体」と認識し
 ていた「私」に「心」という認識が浮上してきたことである。翌朝、「私」は、新しい感覚が生まれていることに気
 がついた。そして〈あの十字架〉の〈下に行つてみようかといふ観念〉に襲われる。一方で、実行することは、敵
 の中に死ぬことも意味すると考える。(——「一二 象徴」その夜、〈村に歩み入つた〉夢を見る。会堂に入り、自
 分の葬式が行われているのを見る。〈合掌して死んだため聖者として崇められて〉いた。

鋭い悲しみが私の心を貫いた。ではやはり私は死んでゐたのである。それなら、今これを見てゐる私は誰であらう。多分私の魂であらう。(中略) 私は再び私の顔を見た。いや、私は生きてゐた。唇が紅を塗つたやうに赤く、閉された瞼は顫へてゐた。私は目醒めてゐるのである。眼を開けないのは、死を粧つてゐるだけなのである。唇には私のよく知つてゐる、あの冷笑さへ浮んでゐる。／「デ・プロフンデイス」と突然その唇がいつた。「われ深き淵より汝を呼べり」*De profundis climaxi*——この言葉が私の口から洩れたことは、事実私がなほ深き淵にあり、聖者でない証拠である。

ここで、「私」は、〈心〉も〈魂〉も欠落した〈意識〉と物質としての〈肉体〉であつたもう一人の自分を見たのではないか。もう一人の私が、「私」を見ているのである。が、棺の中の私は、「われ深き淵より汝を呼べり」^五と漏らす。この言葉は、〈意識〉と物質としての〈肉体〉であつた「私」の認識が、変貌した証左でもある。「汝」とは、〈主〉であることは容易に想像がつく。言うまでもなく、巻頭に掲げられたエピソードと呼応する。そして、

私は了解した。かうしてひとり深き淵に死ぬのはつまらない。殺されるまでも、あの会堂に入つて、生涯の最後の時に私を訪れた、一つの疑問を晴らさねばならぬ。／もしこれが一つの啓示であるならば、もし私が聖者であるならば、私は跪くであらう。

「私」は、〈疑問を晴ら〉すために、夜明けも待たずに〈会堂〉に向かつて出発する。(——「二三 夢」) 八キロほど(中隊から病院までは六キロであつた)の行程を歩いて会堂に向かうが、中隊を離れて〈半月程〉経っていた。(——「二四 降路」) 明るくなるころ林を抜け、〈大きな野〉に出る。〈銃を肩からはづし、斜めに構へて〉さらに進んだ。〈右手の丘〉に〈野火〉を発見する。

私は突然気がついた。私が野火を見た翌朝は、丁度病院が組織的砲撃を受けた日であり、その時我々の大多数が逃げた方向の山からも、野火が上つてゐたことを。私がこの因果的連関を、この時に捉へたのは奇怪であつた。

「私」は、この時、後に起こるある事変を予感する。さらに林を抜けると、(目の前に一つの村全体を見た)。(——「二五 命」無人らしい村を進み、(会堂)の入口に進む。(——「二六 犬」中に(物体)となつた遺骸を発見する。それは、おそらく、(米兵が通過した後に、この村に現れ掠奪して住民に報復を受けた(日本の敗残兵)であつた。日本の敗残兵の出没に、住民は村を棄てたことが想像できた。(——「二七 物語」(会堂の階段)を上り、祭壇の十字架像をみる。

これ等人には随分信心の対象となり得、事実私の少年時の憧憬の的であつた映像に、私が血と屍体しか見得ないとすれば、何かが私の中で變つてゐるのではあるまいか。

と、自らに問う。そして、

床の埃に伏して私は泣いた。十字架に曳かれて降りて来た敬虔なる私が、何故ただ同胞の惨死体と、下手な宗教画家の描いたイエスの刑死体だけを見なければならぬのか。私をここに導いた運命が誤つてゐるか、私の心が誤つてゐるか、そのいづれかである。／「デ・プロフィンデス」／昨夜夢で私自身の口から聞いた言葉が響き渡つた。私は振り向いた。声は背後階上の、合唱隊席から来たやうに思はれたからである。／しかし眼は声の主を探しながら、私はそれが私の幻聴であることを意識してゐた。

そして、素の語りが、出現する。

その声は誰か、たしかに、私の知つてゐる人の声だと私は感じたが、その時誰であるかは思ひ出せなかつた。／今では知つてゐる。それは興奮した時の私自身の声だつたのである。もし現在私が狂つてゐるとすれば、それはこの時からである。／「われ深き淵より汝を呼べり。主よねがはくばわが声をきき……」／少年の時暗誦した旧約の詩句が頭の中を甦つた。

が、「私」は、〈比国のみすばらしい会堂の内部には、何も私の呼声に応へるものはなかつた〉と認識する。そして、「われ山に向かひて目をあく、わが助けはいずこより来るや」^六と、再度〈わが助けはいずこより来るや〉と、自問するが、自らが立つ地平を発見する。

この時私は私自身と外界との関係が、きつぱりと断ち切られたのを意識した。地上で私の救ひを呼ぶ声に應へるものは何もない。それは諦めねばならぬ、と思ひ定めた。

ここで、テキストは、大きな断層を迎える。〈その時誰であるかは思ひ出せなかつた。〉(もし現在私が狂つてゐるとすれば、それはこの時からである)は、〈その時〉(今では)〈現在〉(この時)によつて、時間の重層性、語りの構造がよりはつきりする。さらに、〈この時〉私は、〈私自身と外界の関係〉が、〈きつぱりと断ち切られた〉のを意識する。すなわち、「われ深き淵より汝を呼べり」が、さらに、「われ山に向かひて目をあく、わが助けはいずこより来るや」と、そして、〈地上〉には、〈私の救ひを呼ぶ声に応へるものは何もない〉と認識するのである。この意識の断層は、重要である。(ここで「私」は、〈狂つている〉と認定される要素もあるということを読者に明かしてゐる。)——「一八 デ・プロフィンデス」落胆と疲れのためか会堂で寝てしまうが、人の歌声で目を覚ます。そ

して会堂に入ってきた女の悲鳴のために混乱の中で衝動的に彼女を撃つてしまった。一緒だった男は逃げた。二人が何故来たのかを詮索し、塩（因みに、『文体』四号稿（一九四九・七）のタイトルは、「鶏と塩——『野火』の2」であった）を発見し得る。（——「一九 塩」）

「私」は、男が逃げたこともあり、危険を感じ、会堂から逃げることにした。が、「私」の心を循環するのは、殺人を（偶然であつた）〈事故であつた〉と、自己あやしと〈事故なら何故私はこんなに悲しいのか〉という感情であつた。「私」は、〈流れる水〉に、〈繰り返す運動〉循環を見出し、〈それは自然の中にあるやうに、人生の中にもあるべきであつた〉と考える。しかし、

昨夜からの私の行為は、この循環の中にはなかつた。しかし結果は、一人の比島の女を殺すことで終つた。あれは事故であつたが、しかしもし事故が起こつたのが、私とその循環からはづれたためだつたとすると、やはり私の責任である。（中略）私はそのまま銃を水に投げた。

明らかに、「私」は、逡巡の果てにこの世的な帰属、すなわち兵士であることを放棄した事を意味する。形骸であつたとしても、社会的に帰属する集団を自ら放棄する。

私は孤独であつた。恐ろしいほど、孤独であつた。この孤独を抱いて、何故私は帰らなければならないのか。

「私」は、どこに帰るのか。同じ道でも状況は異なる。異なつたステージの道を通りながら、新たな帰属に踏み出して行く。（——「二〇 銃」）

「私」の帰属を求めての行程は、教会に人を求めてゆく↓殺人を犯す↓取り返しをつかない絶望孤独を味わう、という形で挫折することとなる。

〈光るもの〉を発見した「私」の帰属と離脱の反復を整理すると、↓F)〈十字架〉を目当てに人を求めて会堂への道 ↓G) 会堂内で殺人を犯してしまふ ↓H) 肉体を保持する塩は得たものの、殺人という大罪を背負つて絶対孤独の中で同じ道を新たな帰属を求めて〈帰る〉。

三 昏迷の逃亡と転身と狂気

「私」田村二等兵は、〈私の丘〉で、帰還する途中で三人の日本兵に出会う。そして、自分の中隊が全滅したことを知った。既に中隊を離脱し、あるいは〈銃〉を放棄していた身ではあるが、観念的世界でも社会的帰属する場を失ったことに追い打ちをかけた。会堂で手に入れた塩を仲介に〈社会的関係〉の裡に共に行動することとなる。

（——「二一 同胞」米軍から避け逃れるようにして行動しているうちに、〈三々五々連れ立つた日本兵が、丘の影、叢林から不意に現れて、道に加わつた〉やがて一個中隊程の蜿蜒たる行軍隊形）になつた。〈或る日〉病院への砲撃で別れた安田と永松にあうが、〈降伏〉の話聞き再度離れることになる。（——「二二 行人」逃亡兵は雨の中を進むこととなる。（——「二三 雨」そして、敵を目撃しながら、或いは機銃掃射を受けながら集結の場所であるバロンポンを指し潜み進んだ、「私」にとつては上陸以来、〈最初の「敵」〉に接触したりした。行動を共にしていた兵隊から〈人肉食〉の話聞く（——「二四 三差路」暗闇を敵の銃撃を避けながら、膝まで届く深い泥の中を進むが、〈誰かに見られてゐる〉ことを感じる。（——「二五 光」戦車の砲撃を受け、再び一人になつた。〈赤十字マークのついた〉車に出会い、降伏を考えたが、〈無辜の人を殺した身体〉であることを思い出す。

私自身の任意の行為によつて、一つの生命の生きる必然を奪つた私にとつて、今後の私の生活はすべて必然の上に立たねばならないはずであつた。そして私にとつて、その必然とは死に向かつての生活でなければならなかつた。

一旦、集団に帰属したが自らの行為によつて、またそこから逸れることとなるのである。(——「二六 出現」)
 〈それからなほ幾日か、私が独りで歩いた時間は、曆によつて確認されるが、その間私が何をし、何を考へたかを思ひ出す〉のは困難であつた。すなわち生きている認識がなかつたのである。敗残兵に会つたりしたが彼らに帰属することもなかつた。(——「二七 火」) 雨の山中を二合ばかりの塩をなめながら生き延びてきたが遂にそれも尽き重大な局面を迎えた。〈硬直が進んでゐない屍体を見て、その肉を食べたい〉と思う。が、〈新しい屍体を見出す毎に〉〈あたりを見回す〉が、〈誰かに見られてゐる〉と思う。第三の視線の再発見である。最初の発見から見れば、より濃厚で深化された思ひである。

そして、「私」は、新たな地平に立たされる。

「何だ、お前まだゐたのかい。可哀さうに。俺が死んだら、ここを食べてもいよ」／彼はのろろと痩せた左手を挙げ、右手でその上膊部を叩いた。

「私」は、〈瀕死の狂人〉(将校) のこの言動を見聞きした。(——「二八 飢者と狂者」) そして、翌日、〈許された〉事を実行に移そうとして、

私の犠牲者が息絶える前に呟いた「食べてもいいよ」といふ言葉が私に憑いてゐた。飢えた胃に恩寵的なこの許可が、却つて禁圧として働いたのは奇妙である。(中略) 私は自分で手を下すのを怖れながら、他の生物の体を経由すれば、人間の血を摂るのに、罪も感じない自分を愛に思つた。(中略) この物体は「食べてもいいよ」といつた魂とは、別のものである。(中略) 私は誰も見てはゐないことを、もう一度確めた。

が、「私」は異なる経験ををする。

その時変なことが起つた。剣を持った私の右の手首を、左の手が握つたのである。(中略) この時は驚いた。右の手首を上から握つた、その生きた左手が、自分のものでないやうに思はれた。(中略) 私が今真に食べたいと思つてゐるのは、死人の肉であるか、それともその左手の肉であるかを疑つた。／この変な姿勢を、私はまた誰かに見られてゐると思つた。(中略)「起てよ。いざ、起て……」と声は歌つた。／私は起ち上つた。これが私が他者により、動かされ出した初めである。／私は起ち上り、屍体から離れた。離れる一歩一歩につれて、右手を握つた左手の指は、一本一本離れて行つた。中指、薬指、小指と離れて、人差指は親指と共に離れた。

ここで「私」は、決定的な経験をするのである。(剣を持った私の右の手首を、左の手が握つた)のである。そして今真に食べたいと思つてゐるのは、死人の肉であるか、それともその左手の肉であるかを疑うのである。「起てよ。いざ、起て……」ハの声を聞き、遺体を離れる。「私」が(他者により、動かされ出した初めである)と記している。「私」が、(他者)から(見られてゐる)認識から、(動かされ)ていることを自覚するに至るのである。(「一」「二九手」「私」は、その地を離れた。雨が上がり、陽光の中に見るすべてが美しく、新鮮であつた。が、すべてに(見られてゐるのがうれしかつた)。ここでは、第三の視線の實在の確信に至っている。が、

私は祈らうとしたが、祈りは口を突いて出なかつた。私の体が二つの半身に別れてゐたからである。

(私の身が変わらなければならなかつた)のだ。(「三〇 野の百合) 病院で会つた、永松と再会する。(「三一 眼) その永松から(黒い煎餅のやうなもの)を分けてもらった。(猿の肉)という説明を受けた。そして動けない安田のいるところに案内された。(「三三 肉) かつて(速成の親子)を感じた安田と永松であつたが、

今は安田が永松を警戒しているのが知れた。(——「三四 人類」明け方から雨になった。永松から(二月一〇日)であることを教えられ、「私」は(ひと月、一人でさまよつてゐた)ことを知った。安田のテントに戻った「私」は、唯一の武器、(手榴弾)を奪われてしまう。そして、それぞれが相手それぞれの最後の食料であることを理解する。そして、永松によつてそれは安田に実行された。

まだあたたかい桜色の肉の前に、私はただ吐いてゐた。空の胃からは黄色い液だけが出た。／もしこの時既に、神が私の体を変へてゐたのであれば、神に栄えあれ。／私は怒りを感じた。もし人間がその飢ゑの果てに、互いに食い合うのが必然であるならば、この世は神の怒りの跡にすぎない。

と、考える。「私」の(別れ)ていた(二つの半身)が、一つになった時である。「私」は、(私は神の怒りを代行しなければならぬ)と永松に彼が置き忘れた銃を向ける。そこで、記憶が途切れた。(——「三六 転身の頌」)

ここでテキストは、決定的な時間的断層をみせる。すなわち、「はじめに」でも述べたように、次章「三七 狂人日記」において、テキスト「野火」は、新たな展開を見せる。

三七 狂人日記

私が見下してゐるのは、東京郊外の精神病院の一室である。窓外の中庭の芝生には、軽患者が一团一团とかたまつて、弱い秋の陽を浴びてゐる。病舎をめぐつて、高い赤松が幹と梢を光らせ、これら隔離された者共を見下してゐる。

読者が読み進んできたテキストの時間は唐突に六年間進み、さらに、読み続けてきたものが「狂人日記」であり、狂人の手記であることが明かされ、物語的時空に誘われる。もう一度、物語として読み直し、綴り直すことを要請

される。すなわち、物語とは、過去を綴り直しの編集作業を通して、書き手の〈書く〉時点に把握している〈語り〉の核に向かって語られるのが通常である。「私」田村元一等兵が、物語の終息に向かってその世界を語ってきたのである。それは、医師が「私」に、「想起に整理と合理化が伴ふことは止むをえません」と答えるのに共通する。

「私」が、〈教会〉から離脱した以降の帰属と離脱の跡をまとめておこう。

I) 塩を得てそれを手段に古兵たちと行動を共にする↓米兵優勢で〈三叉路〉を渡れない ↓J) 一人残される。そして、第三の視線の予感発見 ↓〈瀕死の狂人〉(将校)の言動を見聞 ↓K) 異な経験を通して第三の視線の实在の確信↓が、この反復は、第三の視線の発見によって最後に変調をきたす ↓L) 旧知の安田が若い永松と出会い行動を共にする↓許しがたい行為の容認と新たな発見 ↓M) 懲らしめようとするが、記憶を失う ↓N) 精神病院での自己の発見↓記憶を〈狂人日記〉として書き起こすこととなる。

割り込んだ「私」の肉声は、また、空白の六年間を語り始める。彼の物語は続く。私が記憶を再び取り戻したのは、〈オルモックの米軍の野戦病院〉であった。そして〈昭和二十一年の三月病院で復員した〉。〈五年後の〉〈五月のある日この精神病院〉に入院した。繰り返すが、読者が、「三七 狂人日記」で投げ出された時間は、事件の六年後の時間である。そして、

もし私の現在の偶然を必然と変へる術ありとすれば、それはあの権力のために偶然を強制された生活と、現在の生活とを繋げることであらう。だから私はこの手記を書いてゐるのである。

と、「狂人日記」執筆の必然を語る。(——「三七 狂人日記」さらに、〈この手記は元来、医師の薦めによつて始められたものである〉と手記執筆の背景を明かす。そして、再び野火に相当する。

比島人の観念は私にとつて野火の観念と結びついてゐる。秋の穀物の殻を焼く火か、牧草の再生を促すため

に草を焼く火か、或ひは私達日本兵の存在を、遠方の味方に知らせる狼煙か、部隊を離脱してからの孤独なる私にとつて、野火はその煙の下にゐる比島人と因果関係にある。／＼では私は再び野火を見てゐたかも知れぬ。／＼耳の底、或ひは心の底に、私は太鼓の連打音に似た低音を聞くやうに思つた。その長く続く音は、目の前の地上にますます延びて行く赤松の影と重なる。かつて比島で私の歩く先々について廻つた、野火の印象に重なる。(中略)そして遂に私はその記憶喪失の全期間を思ひ出すことが出来た。いや全部ではないが、多分書きながら思ひ出して行くであらう。

と、想起される〈野火〉と手記執筆の関わりを明かしている。(この野火に関わる記述は、前述した「三 野火」記述と呼応する)(——「三八 再び野火に」そして、テキストは、最終章を迎える。そして、テキスト「野火」は、日本文学史上例外ともいってよい「神に栄えあれ」で閉じられたのである。「神に栄えあれ」は、既に指摘したように「／＼もし……であるならば——／＼もし」を反復し、その条件が成立すれば〈神に栄えあれ〉となる。

むすび 〈狂人日記〉としての「野火」、そして〈野火〉のしるしと恩寵

〈狂人日記〉という文学形式は、珍しいものではない。なぜなら、人の生も〈狂なる世界〉〈虚なる世界〉と〈非狂なる世界〉〈実在の世界〉が綾なす世界で展開される現実ともいえるからであらう。この両者をどのような位置づけで認識し綴り直すかは、それぞれの〈個〉に託される事柄である。

これはある精神病院の患者、——第二十三号が誰にでもしやべる話である。彼はもう三十を超えてゐるであらう。が、一見した所は如何にも若々しい狂人である。彼の半生の経験は、——いや、そんなことはどうでも善い。彼は唯ちつと両膝をかかへ、時々窓の外へ目をやりながら、(鉄格子をはめた窓の外には枯れ葉さへ見え

ない檜の木が一本、雪曇りの空に枝を張つてゐた。)院長のS博士や僕を相手に長々とこの話をしゃべりつづけ
た。尤も身ぶりはしなかつた訣ではない。かれはたとへば「驚いた」と言ふ時には急に顔をのけ反らしたりし
た。……

日本近代文学に現れた〈狂人日記〉のスタイルをとった代表的な作品である芥川龍之介「河童」の冒頭部書き出
しである。テキスト「河童」は、このような形で開かれた。言うまでもなく、「河童」は、Samuel Butler (1835-1902)
のユートピア小説『エレホン』Erewhon からヒントを得ている。河童国に紛れ込んだ「僕」を描く。そこは人間社
会と価値観が倒錯し逆転した世界であった。人間社会の現実と河童国の断層、違和感は、読者に新たな人間社会の
真なる世界を想到させた。描かれた異な世界の価値観を描くことによつて、逆説的に社会の醜悪な矛盾を炙り出し、
幾多の精緻な言辞を駆使した世界よりもリアルさを提示した。此処に、〈狂人日記〉の面目躍如を見る。「野火」は、
「狂人日記」として、構想され起筆された。たとえば、大岡自身も「人肉食について」(『新潮』一九七三・一一)で、
私が『野火』を書いたのは昭和二十四—二十六年ですが、最初は「狂人日記」という題にするつもりだった
んです。主人公が気違いというのはいわば前提でして、いまの形では、おしまいに精神病院に入ることになつ
ていますけれど、最初雑誌『文体』へ発表したときには精神病院から始まっていたんです。

既にふれたが、初出『文体』稿(註三参照)では、「河童」同様、読者は最初から〈狂人日記〉として、テキスト
を読み進めることとなる(大岡の〈狂人日記〉着想は、「ゴゴリ風のアレゴリー」と記している。青少年時代愛読
した芥川作品の一つ「河童」など後期作品の影響を排除できない)。が、定稿では、正確にいえば「おしまい」、最
終章ではなく、その前の章「三七 狂人日記」の冒頭「私がこれを書いているのは、東京郊外の精神病院の一室で
ある」として、〈狂人日記〉であることが明かされる。さらに、「それ(註 保護者としての神)は僕の少年時の幻

影で、大人の智慧には敵いそうもないので、それを狂人の頭に宿らせることにしたのです。」(「創作の秘密——『野火』の意図」『文学界』一九五三・一〇)とも言っている。

〈狂人日記〉「野火」は、「私」田村元二等兵という語り手によって、彼の経験を(狂なる世界)の編集作用を経て語られたこととなる。が、初出稿(『文体』稿)では、「この記録を書かせたことが、彼の狂気を進めたものではなかつたか」と気が咎めてならない。注意深い読者は必ずや記録の進行とともに次第に著しくなつて行く狂気の徴候を認められるであらう」と、以下展開される(記録)が、(狂人日記)的色彩を持つことが明かされる。定稿への改稿は何を意味するのであろうか。が、作者自身は、「狂人という仮定に立っていた第一稿の記述を、殆どそのままに残したので、方々にばら撒いておいた狂気の徴候が、見逃されることになつたようです。」(「野火の意図」)と述べている。(方々にばら撒いておいた狂気の徴候が、見逃されることになつた)というが、(見逃され)たのであろうか。しかし「私」の変節を支えているものは、検証してきた(踏み越え)(越境)の反復であつた。

「私」は、何度(A-N)も、帰属、離脱を繰り返しながら、その都度(踏み越え)(越境)の反復をなし、学習機能により、あるいは反転を伴うほどにより密度の濃い生に向かつたと考える。

まず、「私」は、A)部隊から野戦病院に放逐↓病院は拒否 ↓B)部隊に帰る ↓C)部隊から復帰拒否↓一人山中を絶望的彷徨。野戦病院を目指す↓一度はその行程を外れるが病院に向かう ↓D)病院周辺でたむろする希望なき仲間の発見↓希望なき死を待つべき集団の中に(速成の親子)(帰属集団)を見る↓米兵の組織的砲撃 ↓E)一人になる。そして、丘の上の平穏な日常と林越しに(光るもの)を発見することになる。それは教会の十字架だつた ↓F)人を求めて教会に向かう ↓G「私」は、逆に会堂に現れた比国女を銃撃してしまふ ↓H(塩)を手に入れ一人教会を後にする。ただ、「私」は、どこに帰るのか。同じ道でも、(十字架)を求めてきた道を、肉体を保持する塩は得たものの、殺人という大罪を背負つて絶対孤独の中で同じ道を帰ることとなる。(「二〇 銃」)「私」の離脱と帰属を求めての行程は、教会に人を求めてゆく↓殺人を犯す↓取り返しのない絶望孤独を味わう、という形で挫折することとなる。

「私」が、教会から離脱した以降も帰属と離脱を繰り返す（↓I）塩を得てそれを手段に古兵たちと行動を共にする↓米兵優勢で〈三叉路〉を渡れない（↓J）一人残される。そして、第三の視線の予感発見↓〈瀕死の狂人〉（将校）の言動を見聞（↓K）異な経験を通して第三の視線の存在の確信↓が、この反復は、第三の視線の発見によって最後に変調をきたす（↓L）旧知の安田が若い永松と出合い行動を共にする↓許しがたい行為の容認と新たな発見（↓M）懲らしめようとするが、記憶を失う（↓N）精神病院での自己の発見↓記憶を〈狂人日記〉として書き起こすこととなる。そして、「神に栄えあれ」を漏らすこととなる。

テクスト「野火」にはエピグラフ「たといわれ死のかげの谷を歩むとも ダビデ」が付されていたが、それに従えば、〈踏み越え〉〈越境〉の反復を通して、「野火」は、末尾の「／もし……であるならば——／もし」に見え隠れする逡巡、保留、読者の介入を反復しつつも、「神に栄えあれ」に行き着く行程の物語として読むことができよう。〈踏み越え〉〈越境〉反復は、三好行雄の「作者のいうように、狂気が神の観念を託す唯一の支点であったかぎり、主人公の狂つてゆく過程は同時に、神を発見するための必然の道でもあったわけだ。」^九と捉えることができよう。

さらに、〈神を発見する行程〉に〈野火〉のイメージが大きく機能していることを看過してはならない。〈私が行く先々に、私が行くため、に野火が起ることはあり得なかつた〉（註四参照）と自覚する〈野火〉は道先案内人のような意味を持つ。最初の生活的なイメージから、運命あるいは神との遭遇の取掛かりのシンボルに行き着く。それは「蜘蛛の糸」（芥川龍之介）において、御釈迦様が健陀多の救済のために卸した（一本の蜘蛛の糸）のイメージに重なる。^{一〇}ならば、〈野火〉は地上から天空に昇りゆく煙りから、天上から地上に下る恩寵のしるしのイメージへの変容をもって完成する。

「野火」における〈野火〉とは、〈一本の蜘蛛の糸〉ならぬ、天空と地上を結ぶ垂直的世界の架け橋であり、通路である。芥川の「天上から地上に上る梯子」（「続西方の人」）的表現を使うならば、「天空から地上に向かって立ち上る煙（野火）」であるといえる。

テクスト「野火」は、「はじめに」でも引用したように、次のように閉じられた。

銃を持つた墮天使であつた前の世の私は、人間共を懲すつもりで、実は彼等を食べたかつたのかも知れなかつた。野火を見れば、必ずそこに人間を探しに行つた私の秘密の願望は、そこにあつたかも知れなかつた。／＼もし私が私の傲慢によつて、罪に墮ちようとした丁度その時、あの不明の襲撃者によつて、私の後頭部が打たれたのであるならば——／＼もし神が私を愛したため、予めその打撃を用意し給うたならば——／＼もし打つたのが、あの夕陽の見える丘で、飢ゑた私に自分の肉を薦めた巨人であるならば——／＼もし、彼がキリストの変身であるならば——／＼もし彼が真に、私一人のために、この比島の山野まで遣はされたのであるならば——／＼神に榮えあれ。

(三九 死者の書)

〈野火〉のイメージは、このテキストでは、通奏低音のように流れ、第三の視線の発見、と神との遭遇をもたらず。野火に〈人間を探しに行〉き、会堂に〈人を求めに行〉き、人ではなく第三の視線を発見し、神と遭遇したともいえよう。

「野火」は、田村一等兵が過去の記憶を語るという形をとっているが、言い換えれば物語形式をとる。物語は、語り手という編集者が、語りの命根に向かつて、編集作業をしながら語りこんでゆく。このテキストにおいて、〈命根〉とは何か。いうまでもなく、「神に榮えあれ」に収束される末尾の語り手の述懐に他ならないと捉えることは容易である。日本文学上で、例外的な「神に榮えあれ」で結んだことが齎したものは何であろうか。大岡自身も、「キリスト教の問題は、私の少年時の経験の中にあり、私は自分なりに真面目に解決したつもりです。『神に榮えあれ』という句で小説を結んだことに、ひそかな喜びを感じています」(「わが文学に於ける意識と無意識」と記している。作者自身の必然、テキストの必然があつた。「野火」において、「神」は回避できる問題ではなかつたのである。

大岡は、青山学院中学時代(将来は牧師になるつもりでしたが、漱石、龍之介にエゴイズムを教わつて、博愛なぞが甘く見え)さらに(教会の大人たちは勢力争いと情事に耽つていた)(「外国文学放浪期」『文芸』一九五二・八)

ことを理由に教会を離れた。が、神の問題は、大岡の深奥において通底していたことを窺わせる。この事実と「野火」は、深く交差する。唐突に現れると思われる、あるいは、狂人という設定でしか語ることができなかった「神に榮えあれ」は、更には、語りのオチであり命根でもある語りに「——もし……ならば」が反復されるは、大岡のキリスト教体験抜きでは読み解くことができない。すなわち、神の問題と現実の教会体験の亀裂を、「野火」の時点で修復できていないことを読み取ることができよう。その揺籃、逡巡を「私」田村一等兵は負わされている。

想定される事実、真実と狂気の世界のレンジの中に読者は解放される。語る「私」を、狂気で読めば、語られる「私」の過去も、幻視幻影でしかない。が、おそらくそれを信じざる読者はいまい。なぜなら、自己の読書行為を否定すると云う自己撞着の世界に入る。読書行為とは、虚構フィクションの世界であるテキストに展開する物語に真実を探る行為である。「野火」の世界は、狂気の世界と神の発見の間に想定されるレンジの中で、真実を読みとることが試されるテキストであるといえる。

（註記） 本稿は、第二二回 東北アジアキリスト者文学会議（二〇〇九・八・二八 韓国 龍仁市 Ros記念館）においての口頭発表の内容に、新たに追記したものである。）

注

- 一 章題を列挙すれば、以下のとおりである。小題の流れの中にも、テーマ性を発見できよう。
- 「一 出発」「二 道」「三 野火」「四 坐せる者等」「五 紫」「六 夜」「七 砲声」「八 川」「九 月」「一〇 鷓鴣」「一一 楽園の思想」「一二 象徴」「一三 夢」「一四 降路」「一五 命」「一六 犬」「一七 物体」「一八 デ・プロフィンデス」「一九 塩」「二〇 銃」「二一 同胞」「二二 行人」「二三 雨」「二四 三叉路」「二五 光」「二六 出現」「二七 火」「二八 飢者と狂者」「二九 手」「三〇 野の百合」「三一 空の鳥」「三二 眼」「三三 肉」「三四 人類」「三五 猿」「三六 軀身の頌」「三七 狂人日記」「三八 再び野火に」「三九 死者の書」
- 二 エホバはわが牧者なり われ乏しきことあらじ エホバは我をみどりの野にふさせ、いこひの水濱にとまなひたまふ エホバはわが靈魂をいかしみ名のゆゑをもて我をたゞしき路にみちびき給ふ たとひわれ死のかけの谷をあゆむとも禍害をおそれじ なんぢ

三 我とともに在せばなり なんちの筈なんちの杖われを慰む なんちわが仇のまへに我がために筵をまうけ わがの首にあぶらをそ、
 きたすまふ わが酒杯はある、なり わが世にあらん限りはかならず恩恵と憐憫とわれにそひきたらん 我はとこしへにエホバの
 宮にすま入（波線 引用者 以下同じ）
 初出稿導入部（「文体」第三号 一九四八・二月）のち、「展望」連載の際、削除された。「文体」稿の冒頭と終末部は以下のように
 なっていた。

私が昭和二十年の三月をすごしたレイテ島の俘虜病院に一人の変な患者がゐた。年齢は私と同じ三十二、三の一見普通の男であつたが、食餌について妙な偏執を持つてゐた。つまり肉を一切食べないのである。「冒頭」——（中略）——彼は永らく医者
 が睡眠剤を与へた後注射する栄養剤で生きてゐたが、結局結核が全身的に昂じて、ふた月ばかり前に死んだ。彼は彼独特の不
 思議な神を讃えてゐた。／私は彼にこの記録を書かせたことが、彼の狂気を進めたものではなかつたかと気が咎めてならない。注
 意深い読者は必ずや記録の進行と共に次第に著しくなつて行く狂気の徴候を認められるであらう。／では以下「私」といふの
 は田村鶴吉である。

さらに補足すれば、そもそも、「野火」は、「疎開日記」などによれば（狂人日記）として構想されていた。

四 滅びへの予兆と面峙しながら彷徨する（僕）が登場する「菌車」（芥川龍之介）に、次のような言説を想起させる。「私」と（僕）の
 位相に差異はあるが、興味深い。大岡と芥川については、別稿を用意している。

僕を不安にしたのは彼の自殺したことよりも僕の東京に帰る度に必ず火の燃えるのを見たことだつた。僕は或いは汽車の中から
 山を焼いてゐる火を見たり、或いは又自動車の中から（その時は妻子とも一しよだつた）常盤橋界隈の火事を見たりしてゐ
 た。
 （二）復讐

五 あ、エホバよ われふかき淵より汝をよべり 主よねがはくはわが聲をき、 汝のみ、をわが懇求こゑにかたぶけたまへ ヤハよ
 主よなんじ若もろもの不義に目をとめたまは、 誰かよく立ことをえんや されどなんちに赦しあれば 人におそれかしこまれ
 給ふべし 我エホバを俟望む 我が霊魂はまぢのぞむ われはよく立ことをえんや されどなんちに赦しあれば 人におそれかしこまれ
 まさり 誠にえじが且をまつにまさりて主をまつり イスラエルよエホバによりて望みいだけ そはエホバにあはれみあり また
 ゆたかなる救贖あり エホバはイスラエルをそのもろもの邪曲よりあがなひたまはわん
 （詩篇一一三〇篇 註一に同じ）

六 われ山にむかひて、目をあく、わが扶助はいづこやりきたるや、 わがたすけは天地をつくりたまへるエホバよりきたる エホバはな
 んちの足のうごかざる、を容したまはず 汝をまもるものは微睡みたまふことなし 視よイスラエルを守りたまふものは 微睡む
 こともなく眠る ともなからん エホバは汝をまもる者なり エホバはなんちの右手をおほふ蔭なり ひるは日なんぢ傷ず 夜は
 月なんぢを傷じ エホバはなんちを守りてもろもの禍害をまぬかれしめ 竝なんじの霊魂をまもりたまはん エホバは今よりと
 こしへにいたるまで 汝のいづると入るとをまもりたまはん
 （詩篇一一二篇 註二に同じ）

七 人肉食（カニバリズム）の問題意識は古典的なテーマである。このテキストにも出現する「メデウス号の筏」の話や、近年の大
 規模な例としては、遠藤周作「深い河」でも触れられている一九七二年のウルグアイ空軍機（「便遭難事故が想起される。後者で
 は、遭難した乗客らは、死亡した乗客の死体の肉を食べることで、救助されるまでの七十二日間を生き延びている。大岡自身も、「人
 肉食について」（「新潮」一九七三・一一）で、言及している。

八 たてよ、いざたて、 主のつわもの

見ずや、み旗の ひるがえるを
すべてのあだを ほろぼすまで

君はさきだち 行かせ給わん

(『讚美歌』三八〇番)

九 「戦争と神——『野火』大岡昇平——」(『解釈と鑑賞』一九六二・七・六三・二)

一〇 「蜘蛛の糸」の原典は、「我が主と聖ベテロ」(ラーゲルレーフ)や「二本の葱」(ドフトエフスキー)「カラマーゾフの兄弟」などの
もとなつてゐる民話である。

一一 芥川の絶筆である「西方の人」の「36 クリストの一生」は、以下のように閉じられている。

けれどもクリストの一生はいつも我々を動かすであらう。それは天上から地上へ登る為に無残にも折れた梯子である。薄暗い
空から叩きつける土砂降りの雨の中に傾いたまゝ、……………

一二 我らの文学4「大岡昇平」(一九六六・一二 講談社刊)の巻末に「私の文学」として書き下ろされた。